琉球大学学術リポジトリ

[フォーラム] 学校では教えてくれない地理: 人間と環境に対するステレオタイプに陥っていないか? (特集 地理教育)

メタデータ	言語:
	出版者: 沖縄地理学会
	公開日: 2018-11-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 荒木, 一視
	メールアドレス:
	所属: 山口大学教育学部
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017659

学校では教えてくれない地理 -人間と環境に対するステレオタイプに陥っていないか?-

荒木一視

(山口大学教育学部)

荒木 (2008) において筆者は、デカン高原のみがインドの綿花生産を担ってきたのではないことを説いたが、同様の誤解や不正確な認識が教育現場の至る所に見受けられる。デカン高原・綿花栽培・レグール土という連想は、私たちの世代の人間にとっては疑う余地のない1つの呪文のように唱えられてきたフレーズでもあるが、それは人間と環境にかかわる認識の一種のステレオタイプを作ってしまっている。

誤解の無いように若干の説明を加えておくが、デカ ン高原でインドの綿花の大半が生産されるという認識 は誤りである. インドの綿花は独立以来パンジャーブ, グジャラート及びデカン高原の3つの地域によって担 われてきたというのが正確である. 実際, インドの州 別綿花生産量においては1980年代半ばまではグジャ ラート州が首位を担っており、デカン高原のマハー ラーシュトラ州とパンジャーブ州は2位グループで あった. また,80年代半ばからの10年間はパンジャー ブ州が首位となる. マハーラーシュトラ州が首位とな るのは90年代後半以降である1).また、この生産量 の多さと裏腹にほとんど知られていないのがデカン高 原の綿花の生産性の低さである. マハーラーシュトラ 州の生産性は州別で最高値となるパンジャーブ州の2 分の1~3分の1に過ぎない. これは1970年前後以 降²⁾ かわらぬ格差であり、もっとも格差が開いた時期 には6分の1程度という時期もある. むろん, デカン 高原の綿花の生産性はインドの全国平均を下回り、綿 花栽培地域の中では最低ラインにある.

ここでもう一件触れておきたいのが、デカン高原で綿花栽培が盛んなことの要因と絡めて示される「綿花栽培に適した肥沃なレグール土」という文脈である. どうして、綿花栽培に適しているのに生産性がこれほどまでに低いのであろうか. 学校では決して教えられない側面である. しかし、少し考えればわかることなのであるが、綿花に限らず農作物は土壌条件の善し悪しのみで生産量が決まるわけではない. 気温や降水量、さらには市場との距離などが重要な要因となる. 例えば、デカン高原であるが、おきまりのケッペンの気候区分から言えば BS (ステップ気候) が広がる. す

なわちデカン高原は乾燥気候にあり雨が少ないのである。あるいは中国山地と四国山地に挟まれて瀬戸内は雨が少ないということを知っていれば、東西ガーツ山脈に囲まれたデカン高原の気候を類推することもそう難しくはないはずである。事実、南西モンスーンは西ガーツ山脈にブロックされ、年間2,000mmを越える降水量を記録するムンバイに対して、デカン高原の降水量は概ね1,000mm以下である。すなわちデカン高原は綿花のみならず、農業一般を行う上で重要な降水量が決して豊富ではないのである。

さて,このように見てくると「綿花栽培に適したレ グール土のおかげで、デカン高原はインドの綿花栽培 を (ほとんど) 担ってきた」という認識の不自然さを 理解していただけたと思う. デカン高原の綿花栽培を 土壌という側面を強調することによって説明しようと する不自然さを,である.私はこれを教育現場におけ る環境決定論の悪しきステレオタイプと見なしている のだが、そもそも農業の条件は土壌だけではなく気候 や市場との距離、農村の人口密度などさまざまな要素 がかかわってくる. そうした多様な観点からとらえら れる能力を養うのが、本来の地理教育の仕事であって、 レグール土という土壌条件のみによって綿花栽培を説 明してしまい、それ以外の観点に目を向けることをし ないというのは本末転倒である. その背景に, 人間活 動は環境条件から説明できる、人間と環境の関わりを 論じるという地理学の大きな主題を,極めて単純化, 短絡化して説明しようとするために、重要な含意を見 失ってしまっているという危険性を指摘したい. まさ に角を矯めて牛を殺すである. 人間と環境の関わりや 人間活動を環境と関連させて説明しようとすることは 重要なことであると考える. ただし, それがたとえ教 育現場であったとしても, 短絡的な解釈だけが強調さ れることがあってはならない. 下手をすると極めて単 純化された環境決定論的な思考が地理的思考と間違っ て理解されかねないのである.

これは決して、デカン高原の綿花栽培だけに限ったことではない. 多くの類似の解釈や理解は決して少なくない. 例えば、ガンジス川上流域の小麦作と下流

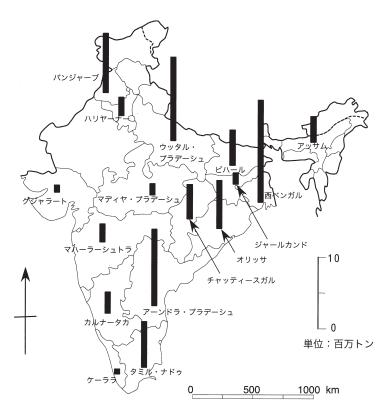


図 1 インドの主要州別米生産量(2001年) (「Agricultural Statistics at a Glance」より作成.)

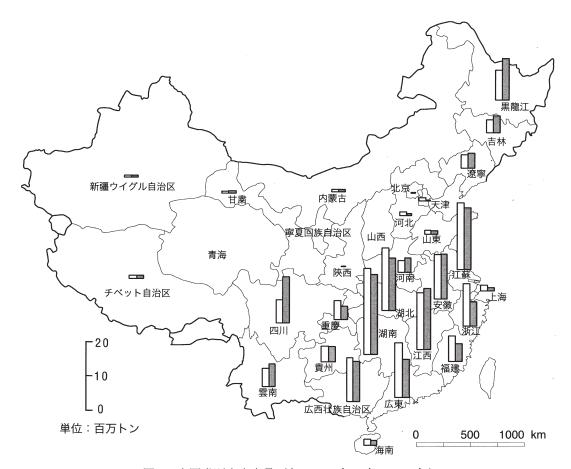


図 2 中国省別米生産量(左:1997年,右:2006年) (「中国区域経済統計年鑑」「中国統計年鑑」より作成.)

域の米作,あるいは中国北部での小麦作と南部での米作といった認識である.地理教育の場では,こうした農業地域区分と気候条件が重ね合わされて説明されることが多かったのではないか.あるいはこうした認識に疑いを差し挟むこと自体が想定外だったかも知れない.その背景には,降水量や気温などといった環境条件が,農業を規定し,食生活を規定するといういわゆる環境決定論的な思考が存在していると考えることもできる.確かにこうした考え方は人間と環境を考える上ではある意味で効果的であったのかも知れないのであるが.

それではここで図1と図2を見ていただきたい.図 1はインドの州別の米の生産量を、図2は中国の省別 の米の生産量を示したものである. 図1を見るとガン ジス川上流域もインドの一大米作地帯となっているこ とが見て取れる. むろん, この図と小麦作の図を重ね 合わせてみるとガンジス川上流部で小麦の生産量が多 いことに比べて下流域では少ないことから, 相対的に は上流域の小麦作と下流域の米作として対比すること は可能であるが、決して上流域で米が作られていない わけではない. むしろ上流部のパンジャーブ州や中流 部のウッタル・プラデーシュ州は下流域のビハール州. あるいはオリッサ州などよりも米の生産量が多いので ある. しかし、決してこうしたことは学校では教えら れていない. 地図帳を見てもパンジャーブ州やウッ タル・プラデーシュ州西部は小麦生産地帯とされ,大 量の米が生産されていることを読み取ることはできな い. 同様に図2からは、いわゆる淮河より南では米の 生産量が多いことがうかがえる. しかし, 近年の米作 の伸びが大きいのは東北地方であり、南部の浙江省や 福建省を上回る米が黒竜江省で生産されているのであ る.「ガンジス川上流域で米作が盛ん」とか,「中国東 北地方で米作が盛ん」という答案ははたして教育現場 では正答とされるのだろうか.しかし、それは紛れも ない事実である. こうした事実は決して, 短絡化した 環境決定論的な思考では把握できない. 同時にガンジ ス川上流の小麦と,下流の米,中国北部の小麦と南部 の米という認識から, ガンジス川上流では米は食べな いとか、中国北部では米は食べないとかといった認識もあわせて広がっているのだろうか。確かに食文化が自然環境に規定されるという側面はあるが、ガンジス川上流域でも、中国北部でも米は日常的に食べられている。われわれが大量のパン(小麦)を日常的に消費しているのと同じである。では、なぜか?を考えてほしい。

教科書に書いてある事実にそぐわないことはスルー する, というようなことは避けて頂きたい. むしろ, 教科書とは違う事実を追求して頂きたい. それを解釈 していくのが地理的思考である. デカン高原の綿花と か,ガンジス川の上流と下流とか,淮河の北と南とか, 何がそうなっていて,何がそうなっていないのか. そ れはどう考えればいいのか、をである. 子どもたちに は短絡的な人間と環境に対するステレオタイプを持っ てほしくないのである. 将来子どもたちが教科書と違 う事実にぶつかったとき,「地理で教えられたことは ウソだった」となってはほしくないのである.「何で そうなっているのだろう」と逆に関心を持ってもらい たいのである. ステレオタイプにあてはめるのではな く、豊かな多様性を持つ地理的事象をありのままにと らえ、それを探ることは興味の尽きないことを伝えて ほしい.

注

- 1) 多くの地理の教科書がデカン高原と綿花とレグール土 についての記述を載せた 1970 年代 80 年代においては、 デカン高原の綿花栽培は決してインド最大ではなかっ た. 逆に近年の地理教科書では、記述内容が大きく削減 されたこともあり、デカン高原の綿花やインドの農業自 体に対する記述がほとんど見られなくなっている.
- 2) それ以前の州別の生産状況はインドにおける州の分割 や合併などの経緯があり、統一的な指標で経年的に遡る ことは難しい.

文 献

荒木一視 (2008): 高等学校地理教科書におけるインド農業の記述 - デカン高原と綿花栽培地域を中心に - . 地理科学, 63, 94-110.